

知恵を創り出す管理会計手法の確立（考え方とその手順）

河合 龍憲（朝日大学）

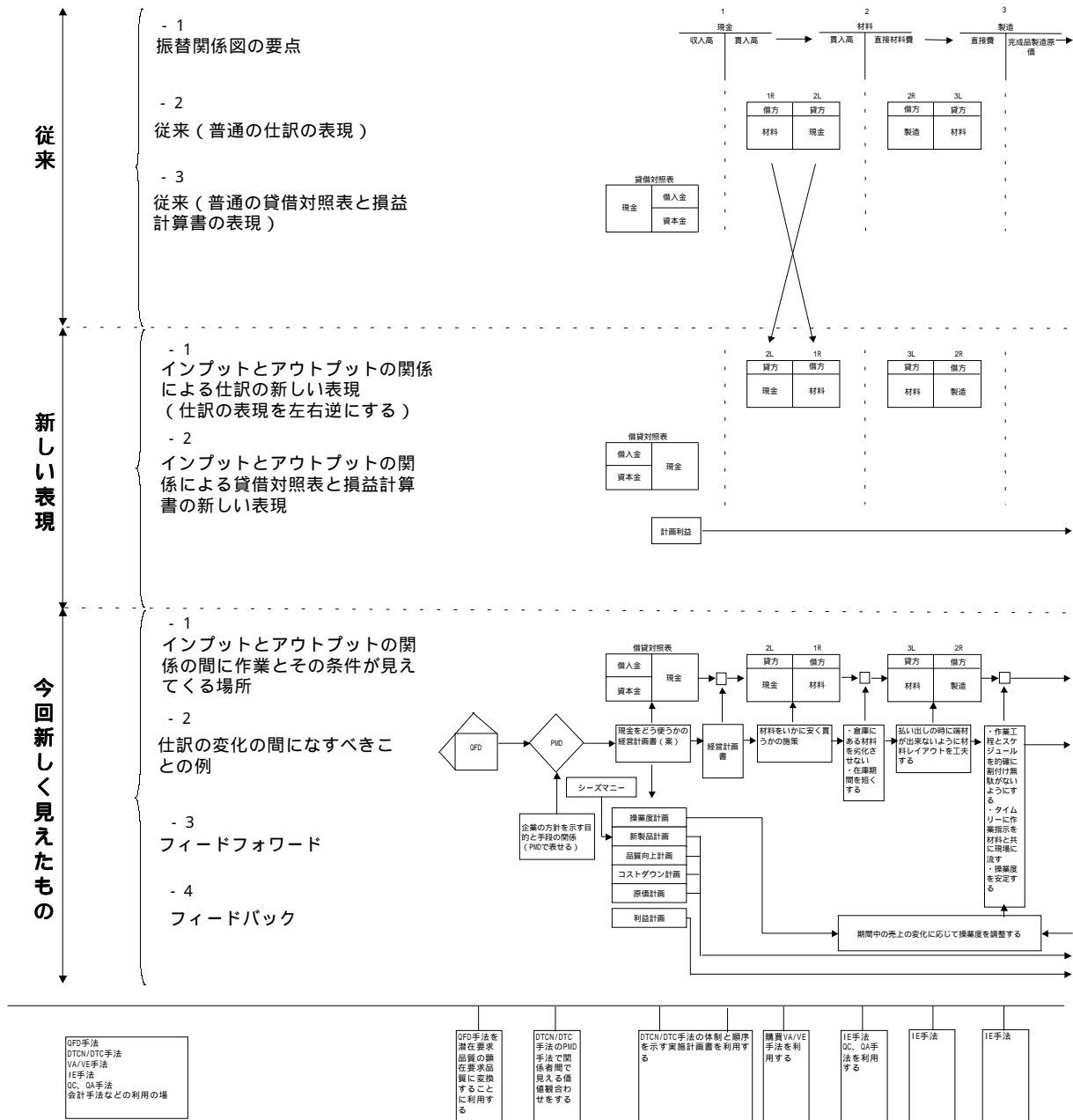
江崎 通彦（朝日大学）

1. 認識

- (1) 理系（技術系）の人は、ものごとの流れを左から右へ流れるインプットとアウトプットの因果関係を把握・理解して構築することに慣れている。
- (2) 現在使われている仕訳の表現の位置を左右逆にする、即ち左から右へ流れるインプットとアウトプットの因果関係にすると理系（技術系）の人は、仕訳の内容を理解しやすい。
- (3) また、この仕訳の表現の位置は、コンピュータを使って簡単に入れ替えたり、同時に表示することができる。

2. この方法で何ができるようになるのか

効果的な投資及び技術活動を、左から右へ流れるインプットとアウトプットの因果関係で表現することができるので、理系（技術系）/経営・事務系の人達の価値向上のための共創、共同作業の場を創り出すことができる。



3. どういう場面で使えるのか

下記のようなケースについて、投資と技術活動の因果関係を合理的、効果的に構築したい場面で使える。
 マーケットクリエイション
 製品企画のプロセス
 DTCN/DTC (Design To Customers' Needs) 設計
 製造コストダウン
 在庫品を極小化した販売活動
 売掛金を極小化する活動
 全体工程のバランスのとれた促進管理
 すべての活動におけるフィードフォワード及びフィードバック

4. 従来の表現方法と比べてどういう差があるのか

- (1) 従来の表現方法との差
 仕訳の位置を左右逆にする。
 損益計算書の左右の関係は、従来の関係と同じである。
- (2) 従来の会計手法の表現では、見えなかった価値向上のための上流費目の効果的な因果関係が、投資と技術活動の両面から見えるようになる。
 この効果的な因果関係が明らかになるので、費目が変わる時に、金額価値を向上するために何をどのようにすればよいかが見えるようになる。さらに、その上流でその価値向上の効果を上げるために、何をどのようにすればよいかが見えてくるようになる。

